

## 第14回 『今鏡』

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

この右の大臣雅定は、御心ばへすなほにて、いとらうある人にておはしけるに、後の世のことなぞ思しとりたる心にや、わづらはしきけなどもおはせて、いとをかしき人にぞおはしましし。若くおはせし頃にや、伊予の御といふ女を語らひ給ひけるに、ものたまはで程も経ぬほどに山城の前の司なる人に慣れぬと聞きて遣り給へりける御歌こそ、いとらうありて、をかしく聞こえはべりしか。

A まことにや三年も待たで山城の伏見の里に新枕する

とはべりけり。昔物語の心地して、いと優しくこそ承りしか。大方歌詠みにおはしき。殿上人におはせし時、石清水の臨時の祭のつかひし給へりけるに、その宮にて、御神楽など果てて、まかりいで給ふほどに、馬場の梢に、

ほととぎすの鳴きけるを聞き給ひて、俊頼の君の、陪從にておはしけるに、「木工の頭の殿、これは聞き給へや」

とはべりければ、「思ひもかけぬ春鳴けば憎くこそはべめれ」と、心とく答へ給ひけるこそ、いとしもなき歌詠みなどしはべらむには遙かに優りて聞こえけれ。四条中納言定頼この料に詠み置き給ひけるにやとさへ覚えて。この聞き給ひて驚かし給ふも、優にはべりけり。かやうにおはせむ人、いとありがたくはべり。出家などし給ひしこそ、いと清らかにめでたく承りしか。別の御病などもなくて、ただこの世はかくて、後の世の御ためとて、右大臣左大将などかへし奉りて、かはり給はらむなどいふ御まうけもなくて、中の院にて頭おろして、籠もり居給へりしこそ、いと心よくはべりしか。御子もおはせねば、兄頭通の御子、今の内の大臣雅道、また雅兼の入道中納言の御子の定房の大納言、養ひ給ひたるかひありて、位高くおのおのなり給へり。御能どもを継ぎ給はぬぞ口惜しくはべる。

# 語句

○らう「労」(名) ①苦労 ②功労。年功。

③熟練。多くの経験。また、深い経験による行き届いたじぶかい。

。わづらはし煩はし「(形) へあれこれ気をつかうさま」

①複雑であるさま。めんどろなさま。②ロヤカさま。

③気がかいされるさま。気がおける。④病気が重い。

。け「気」(名) ①気持ち。気分 ②ようす。けはい。

。かたらひ「語らひ」(名) ①親しく話をすること。

②夫婦の契りを結びこと。男女の仲。

③説得して味方に引き入れること。

。おほかた「大方」(名) (形) 動 大部分。おおよそのこと。

「副」 ①一般に。およそ ②(下)に打消の語を伴う「またく

接」そもそもへ改め「言い起す」とも。

。こころとし「心疾し」(形) 察しがよい。機敏である。

。しも「副助」(本文では)打消の語と呼应して、

かならずしも(くではない)

。いとしも「車語」 ①たいそう。十分に。

②(下)に打消の語を伴う「それほどには。たいして」。

。れう「料」(名) ①それに用いるための物。材料。

②費用。代金。③ため。わけ。

。おどろかす「驚かす」(動) ①びっくりさせる。

②目をさますさせる。③気がせる。

。きよらなり「清らなり」(形) 動 気品があつ美しきさま。